

残したい
想いと風日京



高山市
高根町

野麦峠の館 元管理人

堀野 徹 さん
ほりの とおる

哀しいイメージが強い

野麦峠の歴史を紐解くと

意外な事実もあるんやさ

この貴重な資料は

未来に残していきたいな



峠の語り部へ

高山市高根町野麦地区。同名の小説を映画化した「あゝ野麦峠」の舞台となったことで、山深いこの地域は一気に脚光を浴びました。

堀野徹さんは、資料館「野麦峠の館」の立ち上げ時から村職員として尽力し、定年後は語り部として、訪れる人に野麦峠の歴史を伝えてきました。

現在ここに暮らすのは十数世帯となり、半数が高齢の夫婦や独居世帯です。市内に暮らす子どもが帰省して協力することで、なんとか祭や環境整備を維持していますが、限界集落であることは変わりません。映画の公開から40年以上経ち、「野麦峠の館」の来館者も減少しました。

昭和54年公開の映画「あゝ野麦峠」

明治から大正にかけて、飛騨の農村から野麦峠を越えて諏訪の製糸工場へ働きに出た少女たちの姿を描きました。

(原作は小説家・山本茂実さんによるノンフィクション文学)



病気になり、飛騨へ帰りたいと願うみねを兄が背負って峠へ。山の向こうには懐かしい故郷の風景が…



主人公・政井みねは、遠い飛騨を想いながら厳しい製糸工場で懸命に働きます。



命綱を握り合い、歩いて野麦峠を越える娘たち。崖から落ちてしまう者もいるほど危険な道でした。

資料館「野麦峠の館」が 繋いだドラマ



大切にされた姿

製糸工場は映画のように厳しい環境ばかりだったわけではなく、大切にされて楽しく働ける職場もありました。

先祖が製糸工場を経営していたという来館者さんは、「悪者のイメージを持たれることもあった。本当のことを飛騨の人に語っていただけてうれしい」と喜ばれました。

学べる資料館「野麦峠の館」

平成3年には峠の歴史を学べる資料館「野麦峠の館」

一度は頓挫した映画化でしたが、昭和54年、大竹しのぶさん主演で実現。大ヒットとなりました。

光客を受け入れました。

この小説の映画化を強く希望して奔走し、実在した糸引き工女・政井みねさんの碑も寄贈されています。

当時の高根村はこれを受けて自動車道や宿泊施設の整備の促進に尽力し、江戸時代に峠のよりどころだった「お助け小屋」も復活させて観光客を受け入れました。

様変わりした野麦峠

がオープンし、観光客で賑わいました。

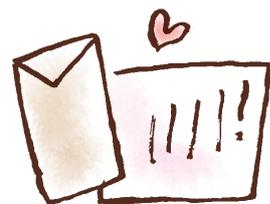
工女たちの本当の姿

映画「あゝ野麦峠」では、貧しい山村から峠を越えて製糸工場へ働きに出た娘たちが悲劇的に描かれました。

もちろん現代と比べたら苦しい時代でしたが、資料からはそれだけではなかったことも分かります。

工女の年収は高く、誇りを持って働いていたことや、製糸工場の待遇も改善されていたことは、あまり知られていない史実です。

当時高価だった写真を撮りに行く余裕があった様子や、恋をして手紙をやりとりしていたことなど、年頃の娘たちには笑顔の青春もありました。



工女への恋文

飛騨に帰省した工女を見初めた青年からの恋文。「写真を送って欲しい」などと想いが書かれていました。

展示当初は2人のその後は不明でしたが、偶然お孫さんにあたる方が来館して結婚されたことが分かり、ご夫婦のお写真をお借りして一緒に展示するようになりました。

いま、
伝えたいこと



〔文・画〕
大森貴絵
高山市

中学生くらいの年齢の娘さんが、歩いて野麦峠を越えて働きに行ったんやで、厳しい時代やったことは確かやけど、悲劇だけではなくたことも知って欲しいと願いながら語り部として伝えてきたんやさ。

飛騨へ帰った時には家族に感謝され大事にされていたり、恋文をもらった青年とひそかに文通したり。たくましい飛騨の娘さんたちの笑顔も、沢山の資料の中に息づいとるよ。